

---



---

## 研究報告

---



---

順天堂大学医療看護学部 医療看護研究23  
P.32-40(2019)

# 小児看護学実習におけるペア実習について学生が認識した利点と欠点

## Advantages and Disadvantages of Pair Practice in Child Health Nursing Education

古屋千晶<sup>1)</sup>  
FURUYA Chiaki

西田みゆき<sup>1)</sup>  
NISHIDA Miyuki

川口千鶴<sup>2)</sup>  
KAWAGUCHI Chizuru

### 要旨

本研究は小児看護学実習において、ペア実習について学生が認識した利点と欠点について明らかにすることを目的にインタビュー調査を行い、質的帰納的に分析した。その結果、学生の認識としてペア実習の利点は、【ペアで実習を進めることの心強さがある】【指導者・教員との関係性が築きやすい】【ペア学生と補い合うことで学習や看護が深まる】【ペア学生の実習への取り組みが学習意欲の刺激になる】【学生間関係性が深まる】の5つにカテゴリー化され、ペア実習の欠点は、【自分の意見が言いつらい】【ペアの学生任せになる】【看護技術習得が不十分になる】【ペアの学生に劣等感を持つ】の4つにカテゴリー化された。

実習指導者・教員は、効果的なペア実習が行えるように学生が認識した利点や欠点を考慮した関わり必要性が示唆された。また、ペア実習の利点を伸ばし、ペア実習の欠点をサポートし、学生同士の間関係やコミュニケーションを考慮して関わること、ペア間で対等に学んでいるか配慮し調整すること、学習環境を整えることが必要であると示唆された。

キーワード：ペア実習、小児看護学、看護学生

Key words : pair practice, child health nursing, nursing student

### I. 緒言

小児医療の現場では少子化（厚生労働省, 2017）に伴い、小児病棟の閉鎖や入院施設の減少、子どもの入院期間の短縮化（厚生労働省, 2016）などから、小児看護学実習での対象患児の確保が困難であり、基礎教育で子どもの看護の実際を学ぶ場が減少している。その上、少子化により子どもに接することがないまま大人となる学生にとって現実的な子どもを知るだけで精一杯であり、看護実践に到達できないと報告されている（西田 他, 2003）。そのような状況の中、A看護系

大学では対応として、患児1名を2名の学生がペアで受け持ちする（以下、ペア実習）方法を導入し10年余りが経過した。

ペア実習を行った学生の思いを二宮（2014）は、ペアの学生との連携や学習内容が深まる点をプラスの思いとし、一方でペアの学生との関係構築の難しさをマイナスな思いとして報告している。また、ペア実習の満足度とペアの学生との人間関係は相関関係にある（平山 他, 2012）と報告があり、ペアの学生間が良好な関係であれば実習に対する満足度が高いことが示されている。ペア実習について学生の思いを調査報告はあるものの、具体的に学生がペア実習について良いことや良くないことをどのように認識しているか明確にしていないため、さらなる研究の積み重ねが必要であ

1) 順天堂大学医療看護学部  
Faculty of Health Care and Nursing, Juntendo University

2) 順天堂大学保健看護学部  
Faculty of Health Science and Nursing, Juntendo University  
(Oct. 31, 2018 原稿受付) (Jan. 23, 2019 原稿受領)

ると考える。そのことにより、より効果的なペア実習に対する指導につなげることができる。また、今までペア実習に関して指導する際に留意することなど明文化されておらず、教育側のペア実習に関する指導方法を具体的に検討する報告は見当たらなかった。ペア実習を行うことでも実習目標が達成できるように、ペア実習の指導方法を明確にし、教員間や教員と臨地実習指導者（以下、指導者）間において統一した関わりをするために、指導方法を明確化することは急務であると考えられる。

そこで、今後のペア実習の指導方法を検討するための一助とするために、まずはペア実習について学生が認識している利点と欠点について学生の語りから明らかにすることを目的として研究に取り組んだ。

## II. 用語の定義

本研究における「ペア実習」は、小児看護学実習において患児1名を2名の学生が受け持ちをすることである。

## III. 実習方法

学生のペアの組み合わせの決定は病棟実習前日、患児の疾患や年齢などの情報提供後に学生自身が行う。

小児看護学実習における病棟実習は通常8日間あり、学生は、入院中の子どもを受け持つ。実習の1日の行動計画の立案と調整は学生が個別で行い、ペアの学生の調整に同席し指導者および教員からの指導についてはペアで受ける。ベッドサイドケアに関しては、主体的に実施する学生をペア間で決定する。看護計画立案に関しては個別で行う。

## IV. 研究方法

### 1. 研究対象者

研究対象者は、14名であった。対象者の背景は、小児看護学実習が終了し単位を取得した4年生であり、全員女子学生であった。

### 2. 研究デザイン

本研究は、質的帰納的研究である。

### 3. データ収集期間

2016年10月～12月および2017年9月～11月である。

## 4. 対象者のリクルート方法

小児看護学実習の単位を取得した学生へ掲示による研究参加を募集した。その際に、『学生への説明』および『インタビューガイド』を添付し、その内容を確認した上で、希望者には共同研究者宛にメールをしてもらい、インタビューの日程を学生と決定した。

## 5. データ収集方法

学生と面識のない共同研究者がインタビューによりデータ収集し、録音したインタビューの学生の語りの内容を逐語録としデータとした。インタビューは、インタビューガイドを用いた。インタビュー内容はペア実習で、良かったこと、良くなかったことについて等であった。インタビュー時間は9分～32分、平均18.4分であった。

## 6. データ分析方法

データ分析は、質的帰納的に分析を行った。逐語録を精読し、学生の語りの意図が損なわれないように、ペア実習について学生が認識した利点と欠点について分類しコード化した。コードを意味内容の類似したもので集め、共通する意味内容を文章で表現し、サブカテゴリーとして統合し、カテゴリー化した。分析の妥当性の確保については、小児看護学の研究者にスーパーバイズを受け分析を検討し厳密性に努めた。

## V. 倫理的配慮

本研究は、順天堂大学医療看護学部研究等倫理委員会の承認を得て実施した（順看倫第28-24）。対象者には、研究目的・内容、研究協力は自由意思、匿名性、データの管理と研究結果の公表について文書を用いて説明した。学生に対して強制的な依頼にならないよう、研究への同意およびインタビューは、実習評価者以外の共同研究者が行い、逐語録のデータ分析から実習評価教員は関わることを説明した。また、インタビューの時期は小児看護学実習の単位を取得した後に行い、インタビュー内容については個人が特定できないように配慮した。

## VI. 結果

本研究における文中では、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを〈 〉、学生の語りを「 」で表記した。

## 1. ペア実習について学生が認識した利点

ペア実習について学生が認識した利点に関して84のコード、12のサブカテゴリーが抽出され、【ペアで実習を進めることの心強さがある】【指導者・教員との関係性が築きやすい】【ペア学生と補い合うことで学習や看護が深まる】【ペア学生の実習への取り組みが学習意欲の刺激になる】【学生間関係性が深まる】

の5つにカテゴリー化された(表1)。

## 1) 【ペアで実習を進めることの心強さがある】

このカテゴリーには、〈ペア実習は心強い〉〈ペア間で相談できる〉の2つのサブカテゴリーが含まれていた。「ペアで実習するのは、すごい心強いと思う。色々なことを学べると思うし、ペア同士で教え合うので身にも付くと思う」や「2人で話し合ったので

表1 ペア実習について学生が認識した利点

カテゴリー	サブカテゴリー	学生の語りより抜粋
ペアで実習を進めることの心強さがある	ペア実習は心強い	ペアで実習するのは、すごい心強いと思う。色々なことを学べると思うし、ペア同士で教え合うので身にも付くと思う。 相手の子も1人でやるよりは、心強いねって言ってくれた。
	ペア間で相談できる	(看護過程) 2人で話し合ったりとかしたので、私としては結構心が楽だな。なんか分からなかったら相談できる相手がいる。受け持ちじゃないメンバーに話すのと、同じ持っている相手に話すのじゃ、また気持ちも違う。 小児の人と関わるのってこの実習くらいだったので、正直どうい言葉掛けとか、言葉遣いでいけばいいのかも分からなかった。ペアの子と相談しながら距離感とかもつかめたっていう意味では、すごく私は良かった。
指導者・教員との関係性が築きやすい	指導者との関係が築きやすい	指導者へ報告する際に、どちらかが足りない情報とかを補えたりして、指導者との関係は築きやすかった。
	指導者への緊張が和らぐ	指導者さんっていうと、今までの実習からちょっと怖いイメージとかがあって、1人で調整とかやるときは不安だったんですけど、2人でやるので、最初にどうやってしゃべろうかみたいなのも打ち合わせできて、そういう面では緊張とかは和らいだ。 (指導者との) 行動調整のときとかは、なんか、1人で説明するわけじゃなくて、もう1人フォロー役がいるっていう安心感もある。
	教員との関係が築きやすい	教員との関係はやっぱり2人で補い合えるので、簡単な言葉になってしまうんですけど、築きやすかったと思う。
ペア学生と補い合うことで学習や看護が深まる	ペア間で補い合う看護ができる	お子さんという時間を増やせるように休憩をずらして入ったりし、2人で分担しながら、調整しながらできたのは良かったかなって思っていて、それが患者さんにとって安心につながった。 (清拭) ペアの子と一緒にやったほうが早く進むってことで一緒にやったんですけど、術後の患者さんっていうところもあったので、そういう点では分担しながら患者さんの負担が減らせた。
	看護技術の再確認ができる	看護技術を実践するにあたっては、2人で確かめ合ってから実践できた。 小児は血圧測定が難しかったりしたので、こっつこうだよな?みたいなのを確認しながらできた。
ペア学生の実習への取り組みが学習意欲の刺激になる	ペア学生の実習の仕方が学べる	他の学生がどういうふうの実習をやってるんだろうっていうのは、小児でほんとにちゃんと見れた。ああ、この子、こういう計画、立ててんだとかは、ペアでやったから分かったことなんで、よかった。
	子どもとの接し方が学べる	自分が聞きづらかったこと、患者さんに対してとかをもう一人の人が上手に聞いている姿を見ることができたりとか、他の学生が実際、ケアにあたってるっていうのを実習中あんまり見る機会がなかったけど、自分は患者さんに対してしかできなかったの、それを、ああ、この子はこんなふうにするんだっていうのが分かったの、私はすごいペア実習よかった。
	ペア学生の実習の姿勢が学べる	ペアの学生がしっかり調べていると思うと、普段の実習よりいっぱい調べて差が出ちゃうのは嫌だと思って、情報収集はすごい頑張りました。
学生間関係性が深まる	ペア間で仲良くなる	私はすごいいいなって思って、相手の人との仲も深められるし、どういうケアをするかについて良く話せるし。
	グループ間で仲良くなる	グループの中でペアごとに、不安とか分かんないこととかをみんな、聞けてよかったんじゃないかなと思う。 グループの仲が深くなった。ディスカッションみたいなものをする機会が少し増えたかなっていう感じはします。

私としては結構心が楽だな。分からなかったら相談できる相手がいる」と語り、相談相手の存在が心強いと感じていた。

## 2) 【指導者・教員との関係性が築きやすい】

このカテゴリーには、〈指導者との関係が築きやすい〉〈指導者への緊張が和らぐ〉〈教員との関係が築きやすい〉の3つのサブカテゴリーが含まれていた。「指導者さんっていうと、今までの実習からちょっと怖いイメージとかがあって、1人で調整とかやるときは不安だったんですけど、2人でやるので、最初にどうやってしゃべろうかみたいなのも打ち合わせできて、そういう面では緊張とかは和らいだ」や「教員との関係はやっぱり2人で補い合えるので、簡単な言葉になってしまうんですけど、築きやすかったと思う」と学生は、指導者や教員との関係性について語っていた。

## 3) 【ペア学生と補い合うことで学習や看護が深まる】

このカテゴリーには、〈ペア間で補い合う看護ができる〉〈看護技術の再確認ができる〉の2つのサブカテゴリーが含まれていた。「お子さんという時間を増やせるように休憩をずらして入ったりし、2人で分担しながら、調整しながらできたのは良かったかなって思っていて、それが患者さんにとって安心につながった」や「協力しながらできたのでお互いのできてない部分とかも補いながら一緒になってできたのでよかった」や「看護技術を実践するにあたっては、2人で確かめ合ってから実践できた」と学生は語り、ベッドサイドに関わる時間の工夫をすることで患児の安心感や学生自身の負担が軽減することまた、お互い自分が不足していることを補ったりしていた。

## 4) 【ペア学生の実習への取り組みが学習意欲の刺激になる】

このカテゴリーには、〈ペア学生の実習の仕方が学べる〉〈子どもとの接し方が学べる〉〈ペア学生の実習の姿勢が学べる〉の3つのサブカテゴリーが含まれていた。「他の学生がどういうふうの実習をやっているんだろうっていうのは、小児でほんとにちゃんと見れた。ああ、この子、こういう計画、立ててんだとかは、ペアでやったから分かったことなんで、よかった」や「ペア学生がしっかり調べていると思うと、普段の実習より沢山調べて差が出るのは嫌と思って情報収集は頑張った」と学生は語り、ペアの学生に対する実習への姿勢を学び自身が刺激を受け

ていた。

## 5) 【学生間関係性が深まる】

このカテゴリーには、〈ペア間で仲良くなる〉〈グループ間で仲良くなる〉の2つのサブカテゴリーが含まれていた。「私はすごいいいなって思って、相手の人との仲も深められるし、どういうケアをするかについて良く話せるし」と学生は語り、ペアで仲良くなることで、「グループの仲が深くなった。ディスカッションみたいなものをする機会が少し増えたかなって感じはします」と語った。

## 2. ペア実習について学生が認識した欠点

ペア実習について学生が認識した欠点に関して39のコード、9のサブカテゴリーが抽出され、【自分の意見が言いづらい】【ペアの学生任せになる】【看護技術習得が不十分になる】【ペアの学生に劣等感を持つ】の4つにカテゴリー化された(表2)。

### 1) 【自分の意見が言いづらい】

このカテゴリーには、〈ペアと意見を合わせるが大変である〉〈自分の意見が言いづらい〉〈指導者との調整の際、配慮する〉の3つのサブカテゴリーが含まれていた。「ペアの子との共有とか話し合いも行動計画立案で考えていかなきゃいけないっていうのは、ペアじゃない実習のときより少し大変」や「自分が同じ事について、他の事を思っている、相手が少し違う視点で言った時に、意見を言いづらかった」、「こういうことを言われたら、結構傷つくなって、少し気を遣いました」と、自分の考えや意見の相違時にペア学生に意見の言いづらさや配慮していたと語っていた。

### 2) 【ペアの学生任せになる】

このカテゴリーには、〈ペアの学生に甘える〉〈ペアの学生に任せる〉の2つのサブカテゴリーが含まれていた。「その子の知識に少し甘えてしまったところがあって。分かってはいるんですけど、1人で最初から理解するよりも、足りない感じになってしまったかなと思います」や「私自身あまりお子さんが得意じゃないので、見学できれば、まあ、大丈夫かなぐらいな感じでした」と学生は語り、ペアの学生に学習面や子どもとの関わりに対して甘え、任せられていた。

### 3) 【看護技術習得が不十分になる】

このカテゴリーには、〈看護技術経験の回数が減る〉〈ペアの学生に譲る〉の2つのサブカテゴリー

表2 ペア実習について学生が認識した欠点

カテゴリー	サブカテゴリー	学生の語りより抜粋
自分の意見が言いづらい	ペアと意見を合わせるのが大変である	ペアの子との共有とか話し合いも計画立案で考えていかなきゃいけないっていうのは、ペアじゃない実習のときより少し大変。
	自分の意見が言いづらい	自分が同じことについてこう、ほかのことを思っていたとしても、相手が少し違う視点で言ったときに、自分の意見を言いづらかった。 こういうことを言われたら結構傷付くなってというのが分かるので。逆に、そういうところで少し気を遣いました。
	指導者との調整の際、配慮する	指導者さんと調整が同じ人で2回やることになるため前にやってる学生と違うこと言わなきゃいけないんじゃないかなとか……。1対1でやるときは違う配慮というか、考えることというか、そういうのがあって、ちょっと自分としてやりづらかった。
ペアの学生任せになる	ペアの学生に甘える	その子の知識に少し甘えてしまったところがあって。分かってはいるんですけど、1人で最初から理解するよりも、足りない感じになってしまったかなと思います。
	ペアの学生に任せる	誰かもう1人が居ると、頼ってしまうので、あ、お願いみたいな感じで、一緒にやろうとかっていってしまうところもある。 私自身があまりお子さんが得意じゃないので、見学できれば、まあ、大丈夫かなぐらいな感じでした。
看護技術習得が不十分になる	看護技術経験の回数が減る	技術を習得するっていう部分では、できたかって言われれば、そうではないかなと思って。 (看護技術を) ああ、またやっちゃったよとは思ったんですけど。まあ、しょうがないので。
	ペアの学生に譲る	看護ケアは、友だちが結構全部やってしまって、私はあんまりできなくて、見てるだけだったりとか、手伝うだけだったりとかが結構多かったので、偏りはすごいあった。 技術の面だけは一人でできたら、もうちょっと（できた）もう1回できた。
ペアの学生に劣等感を持つ	教員からの評価が気になる	学生は先生に評価される側なので、例えば、自分が言っていないでペアの子が計画発表したりすると、こっちはやっぱり焦るといえるか、ああ、自分にはそういう考えがなかったっていうことで、先生も一緒に入られるので先生からの評価を、より気にしてしまう。 結構、相手の子があなたにはできるからすごいよねみたいなのを（指導者や教員から）言われるのが、私はあんまり好きじゃなかった。
	ペアの学生に劣等感がある	私が組む相手が決まったときに、1人の子はすごくお子さんが大好きな子で、私との温度差が出たらどうしようって思った。 こっちの子の方ができてるなって思われてるんじゃないかっていう劣等感みたいなのは、ちょっとあった。

が含まれていた。「看護ケアは、友だちが結構全部やってしまって、私はあんまりできなくて、見てるだけだったりとか、手伝うだけだったりとかが結構多かったので、偏りはすごいあった」や「技術の面だけは一人でできたら、もうちょっと（できた）もう1回できた」と学生は語り、ペアの学生に技術を譲り、自身が行う看護技術経験が少なくなったことを欠点として語っていた。

#### 4) 【ペアの学生に劣等感を持つ】

このカテゴリーには、〈教員からの評価が気になる〉〈ペアの学生に劣等感がある〉の2つのサブカテゴリーが含まれていた。「学生は先生に評価され

る側なので、例えば、自分が言っていないでペアの子が計画発表したりすると、こっちはやっぱり焦るといえるか、ああ、自分にはそういう考えがなかったっていうことで、先生も一緒に入られるので先生からの評価を、より気にしてしまうっていう…」や「相手ができているって思われているんじゃないかっていう劣等感みたいなのは、ちょっとあった」と語り、ペア学生との評価の差や劣等感を感じていた。

## VII. 考察

### 1. ペア実習について学生が認識した利点

学生がペア実習について認識した利点は、お互いに

刺激し合いながら共に学ぶ機会となり、子どもへの看護援助に対して相談できる相手がいることを学生は心強く感じるようになった。

学生は、同じ子どもを2人で見ることによってペアの学生の気づきや行動から色々な事を学んでいた。通常の実習でベッドサイドケアは、患者と1対1もしくは指導者や教員が入り1対2で関わることになるが、ペア実習においてはベッドサイドで子どもや家族と関わる際、ペアの学生がケアを一緒に実施したり、見守ったりしている。このことで、ペアの学生の存在が【ペアで実習を進めることの心強さ】に繋がっていた。佐藤ら(2018)の学生のペア実習の体験による報告においても同様の結果が示されており2人だから心強く、子どもと関わる際に困難な事でも相談しながら進められ、力を合わせて実施でき、ペア学生の存在が子どもとかかわる原動力になると述べられている。学生は、ペアで子どもと関わることを心強いと感じながら、実習を進めることや子どもとの関係性を築くことができていると考える。

学生は、慣れない病棟の環境であることや緊張感のある臨床の場で自分が実習を進めることができるか不安が生じ、指導者に対するイメージを怖いと表現している。しかし、学生はペア実習することで、【指導者・教員との関係性が築きやすい】と認識していた。それは、学生はペアの学生にフォローされることで、指導者に対する緊張感が緩和され、2人で実習に取り組み乗り越えることができる。そのことにより、指導者や教員との関係性も築きやすく、関係性が良好になることができると考える。現在、医療の現場では1人で行っていた看護を2人で行う、パートナーシップ・ナーシング・システム(PNS)が取り入れられ、心身が楽になる、コミュニケーションが増す、能力開発に繋がるなどの効果を示すと報告されている(三輪他, 2015)。これと同様に実習に対して緊張の強い学生にとっては、患者を2人で受け持つことで観察する際に気づくことが増え、看護を深めることができるため有効であると考え。本研究のペア実習について学生が認識した利点が効果的に機能することで、学習効果や子どもに良い看護の提供に繋がることが考えられる。

看護技術に関してはお互い、子どもに実践している場面を近くで見ることによって手順等を2人で再確認をしていた。その上学生は、お互いに実習の仕方や子どもへの接し方、実習への姿勢を学ぶことができると感じ【ペア学生の实習への取り組みが学習意欲の刺激になる】

ことが明らかになった。通常の実習では、他学生が患者と関わっている姿を見ることは稀なことである。他学生が子どもに接する姿や、声かけの方法など、学生同士が子どものベッドサイドで学び合う環境はペア実習だからできることであり、学生は同じ立場の学生の姿からの学びは多いことが考えられる。これは、大学教育において注目されている協同学習に通じている。協同学習は、能動的な学習によって仲間同士の学び合いが有効である(Barkley et al., 2009/2009)と述べられているように、同じ患児を同じ目標を持ってペアで看護援助することで学生にとっては大いに学びの機会になる。さらに、ペアの学生が学習している姿を間近に感じることで、自分も頑張らなければならないと実習に対する意欲につながったと推察する。

また、実習を通してグループの【学生間の関係性が深まる】ことが明らかになった。ペア実習することにより、毎日子どもへの援助等を話し合うことでペアの関係性が深まり、実習グループ内みんなでディスカッションする機会が増えることで実習グループの学生同士の関係性も深まり、グループダイナミクスにより学習効果に期待できることが考えられる。

## 2. ペア実習について学生が認識した欠点について

学生がペア実習について認識した欠点は、ペアになった学生に頼ってしまうことや自分の意見をペアの学生に対して言いづらいといったコミュニケーションに対する苦手意識が明らかになった。

【自分の意見を言いづらい】ことが明らかになったことは、藤尾ら(2018)が20代前半の学生の傾向は日常生活におけるコミュニケーション能力の低下と指摘していることに関係している。学生は、ペアの学生に自分の考えを伝えることに難しさを感じ、特に相手の考えが自分と違う場合、自分の意見を言えなくなってしまう傾向がある。学生は、ペアの学生に自分の意見を言うことにより、傷つけてしまうのではないかと思いいペアの学生に気を遣っていた。このことは自分の意見をペアの学生がどのように思うか不安に思い、意見を言わない方がペア学生との関係性が良好に保て、実習が円滑に進むという考えからくるものであると考える。中神ら(2017)は、PNSに関して相互のコミュニケーション不足によるストレスや人間関係への負担感・依存性を高めると報告している。本研究の結果でも同様であり、自分の意見が言いづらくコミュニケーションが円滑に取れないことによるストレスを生じて

いることが推察された。

また、ペア実習の欠点で【ペアの学生任せになる】ことが明らかになった。子どもが苦手な学生は、ペアの学生のケアを見学することで実習を進めようとし相手に任せていた。相手の学生の学習が進むとその学生からの知識に頼ってしまい、1人で患者の情報収集や疾患など調べることをせずにペアの学生に甘えてしまう依存傾向が生じることが考えられる。これにはお互いが納得した上での譲り合いや任せ合いである場合や、押し付け合いに発展する可能性があり、それは学生間の関係性にも影響を及ぼすのではないかと示唆される。

看護技術に関しては、【看護技術習得が不十分になる】ことが明らかになった。学生同士が毎日の計画を立てる際、相談しながら平等に看護技術を実践できるように調整が必要であるが、子どもの場合、日常生活の援助等のタイミングは限られている（林 他, 2018）ため、1回の機会を正確に実施できるよう学生同士で学び合うことが必要であると考えられる。

さらに学生は【ペアの学生に劣等感を持つ】ことが明らかになったことから、このような感情を抱くのは指導者や教員から比較されているのではないかと評価を気にしているからであり、指導者や教員の学生に対する言動が影響し感じさせていることも考えられる。また、今までの実習でペア実習を体験したことのない学生の場合は、ペア実習に関するイメージがないためどのように実習を進められるか考え、ペアの学生との学習等の差を感じ劣等感を持ってしまう。そのため、教育側はそうように認識している劣等感を無くすように、ペア実習は子どもにとって2人で関わることで倍の学生の力となり、より良い看護につなげることができることを学生に伝えていくことが重要である。

### 3. ペア実習の指導方法について

今回の研究結果を基盤として、学生が認識しているペア実習の利点と欠点について、利点を伸ばし欠点についてサポートする指導体制を整えること、また指導者と本研究の結果を共有し連携していく事が必要である。ペア実習の利点に関しては、ペア実習を進めることによる心強さや学習や看護が深まることにより、ペアで子どもを受け持つことの意味や強みにより子どもにとってより良い看護を提供できることを実習前に学生に周知することが必要である。また、指導者や教員はグループダイナミクスを活用し活性化できるよう

に、実習に対し学生が意欲的に取り組めるよう指導する必要があると考える。ペア実習の欠点に関しては、学習効果に影響があるため欠点として挙げられた内容について指導者や教員は、考慮し学習環境や方法を整えることが必要であることが示唆された。

また、学生はペア間の学びの機会が同程度になる配慮やペア実習のメリットとデメリットに関する情報の開示など教員に求めていると報告（林 他, 2018）がある。そのため、ペア実習の利点と欠点を学生に伝え、指導者や教員は学生がベッドサイドで子どもと関わる際は、ペアのどちらかに看護実践が偏らないように、個々の学生の実習目標の達成度を確認しながら対等に学べているか配慮し調整する必要があると示唆された。今後は、ペア実習の実習指導方法を明確にして指導案を指導者と教員が共有していくことが必要である。

## VIII. 結論

1. ペア実習における学生が認識した利点は【ペアで実習を進めることへの心強さがある】【指導者・教員との関係性が築きやすい】【ペア学生と補い合うことで学習や看護が深まる】【ペア学生の実習への取り組みが学習意欲の刺激になる】【学生間の関係性が深まる】の5つにカテゴリー化された。また、欠点は【自分の意見が言いづらい】【ペアの学生任せになる】【看護技術習得が不十分になる】【ペアの学生に劣等感を持つ】の4つにカテゴリー化された。
2. ペア実習は学生同士が刺激し合い補うことで学習や看護が深まり、より良い看護ができること、一方でペアの学生に自分の意見を言えないことなど、コミュニケーションに苦手意識があることが明らかになった。
3. 指導者・教員は、効果的なペア実習が行えるように学生が認識した利点や欠点を考慮した関わりの必要性が示唆された。また、ペア実習の利点を伸ばし、ペア実習の欠点をサポートし、学生同士の人間関係やコミュニケーションを考慮して関わることで、ペア間で対等に学べているか配慮し調整すること、学習環境を整えることが必要であると示唆された。

## IX. 研究の限界と今後の課題

本研究の参加者は14名であるため一般化は難しい。

今回は、ペア実習について学生が認識した利点と欠点であったが、臨床で指導している指導者や教員が認識している指導側における利点や欠点を明確にし、ペア実習における指導方法を構築することが今後の課題である。

### 謝辞

本研究の趣旨にご理解いただき、インタビューにご協力頂きました看護系大学の学生の皆様に心より感謝を申し上げます。本研究は、2016年および2017年度順天堂大学医療看護学部共同研究費の助成を受けて行い、第38回日本看護科学学会学術集会において発表した内容に加筆・修正を加えたものである。

### 利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

### 引用文献

- Barkley.E.F, Cross K.P, Major.C.H (2009). 安永悟(訳), 協同学習の技法. Collaborative Learning Techniques, pp.3-4. ナカニシヤ出版.
- 藤尾麻衣子, 藤谷章恵, 大式久美子 他 (2018). 臨地実習において学生同士が互いに及ぼす影響に関する文献研究. 武蔵野大学看護学研究所紀要, 12, 31-39.
- 林亮, 齋藤麻子, 石井くみ子 他 (2018). 小児看護実習におけるペア実習に対する学習の評価. 順天堂保健看護研究, 6, 34-41.
- 平山綾蘭, 市川英加, 長田貴子 他 (2012). ペア実習の人間関係と実習満足度のとの関係. 第42回日本看護学会論文集 看護教育, 46-48.
- 厚生労働省 (2016). 平成28年 医療施設(動態)調査・病院報告の概況. 厚生労働省ホームページ. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/iryosd/16/dl/gaikyo.pdf>. (Dec 13, 2018)
- 厚生労働省 (2017). 平成29年 人口動態統計の年間推計. 厚生労働省ホームページ. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikeil7/index.html>. (Dec 13, 2018)
- 中神克之, 吉川尚美, 小寺直美 他 (2017). パートナーシップ・ナーシング・システム(PNS)に関する研究内容の概観. 日本看護医療学会雑誌, 19(2), 52-59.
- 二宮恵美 (2014). 小児看護学実習においてペア実習を行った学生の思い—プラスの思いとマイナスの思いについて—. 第44回日本看護学会論文集 小児看護, 174-177.
- 西田みゆき, 北島靖子 (2003). 小児看護実習における学生の困難感. 順天堂医療短期大学紀要, 14, 44-52.
- 三輪峰子, 川尻麻佑子, 安井裕美子 他 (2015). パートナーシップ・ナーシング・システム導入による成果と成果に影響する要因. 第45回日本看護学会論文集 看護管理, 19-22.
- 佐藤朝美, 小村三千代, 堀田昇吾 (2018). ピア・ラーニングを活用した“ペア受け持ち制”小児看護学実習における学生の体験. 日本小児看護学会誌, 27, 73-82.
- 橘幸子 (2015). 【PNSの運用と効果-施設に合った形を探る】PNSがPNSであるために必要なこと. 看護展望, 40(13), 1238-1242.

---

*Research Report*

---

## Abstract

### Advantages and Disadvantages of Pair Practice in Child Health Nursing Education

In this study, an interview survey was conducted with the aim of clarifying the advantages and disadvantages perceived by students regarding pair practice in child health nursing education, and the results were qualitatively and inductively analyzed. As a result, the advantages of pair practice perceived by students were classified into the following five categories: "Progressing through practice in pairs gives me confidence," "It is easy to build relationships with the clinical instructors and teachers," "Learning and nursing are deepened through the complementary relationship with my fellow pair student," "The pair student approach motivates me to learn," "Pair practice deepens the relationship between the students who are paired." The disadvantages of pair learning were classified into the following four categories: "It's difficult for me to state my own opinion," "Learning is left up to each pair of students," "Pairing results in insufficient acquisition of nursing techniques," and "I feel inferior to my fellow pair student." These results suggest that clinical instructors and teachers must be more involved for pair practice to be effective. They can do so by expanding upon the advantages of pair practice and by compensating for the disadvantages by providing support based on a consideration of the interpersonal relationships and communication between the students, by judging whether each student in the pair is achieving equivalent learning outcomes, and by making suitable adjustments to facilitate learning in order to create an effect learning environment.

Key words : pair practice, child health nursing, nursing student

FURUYA Chiaki, NISHIDA Miyuki, KAWAGUCHI Chizuru